



AGULI

Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

特集 こんな図書館がほしい Part1

No.71

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>

Nov. 1, 2005



オーデュボンの「アメリカの鳥類」

目次

巻頭エッセイ
若き野獣のように 杉浦勢之…… 2

特集

「こんな図書館がほしい Part 1」

- 中田宏横浜市
インタビュー…………… 4
- 「こんな図書館がほしい」を
裏返すと？ 小田光宏…… 6
- 世界の図書館めぐり
小張敬之…… 8
- ウェブの時代の図書館
MARTIN J. Dürst… 10
- 新図書館に望むこと
川口 悦… 11

CiNii の利用方法について …… 12

レファレンス
カウンター紹介…………… 14

展示資料紹介
オーデュボンの
「アメリカの鳥類」…………… 15

図書館広報板 …… 16

若き野獣のように

学長補佐 杉浦 勢之
SUGIURA Seishi

図書館という思い出があります。ゼミの面接でのことでした。大変体格のよい、一際目立った学生が順番を待っていました。目つきが鋭く、挑むような表情を浮かべたその学生のことを、上級生はどう取り扱ってよいかわからないという感じで接していました。

何人かの面接が終わり、いよいよ彼に面接の番が回ってきました。長年の経験から、面接に参加しているゼミ生たちの心象はけっして芳しいものではないだろうと感じました。

彼は上級生の質問に答え、あるスポーツを小さい頃から続けてきたこと、今でもその競技の部活動に参加していることなどを、ぶっきらぼうに話していましたが、その表情には何でそんな詰まらないことを聞くんだ、という心の声ははっきり表れていたのです。

気まずい雰囲気が漂う中、致し方なく私がゼミの志望動機について尋ねることにしました。

「青学で（その競技を）することが長い間の夢だったんです。そしてプロを目指したいと思いました。推薦は無理だったので、必死に勉強して入学しました。でも入ってみたら、自分がレギュラーとして活躍することは無理なんだとはっきりわかりました。僕の人生は、ただそれだけでしたから、これから何をした

らいいのか全くわからなくなり、毎日図書館で寝ていました。ある日、図書館で目が覚めてまわりをぼうっと眺めていたら、世の中にはこんなにたくさん本があるんだと気づいたんです。それから本を一生懸命読むようになり……。彼の言葉を聴きながら、私は、自分が学生だったころの記憶の回廊に迷い込んでいました。

灰色のギリシャ風列柱、夏なのにひんやりとした階段の手すり、古い本の匂い、ページを捲る微かな音、窓から射す西日、古びた白い壁に窓を通して梢の影がくっきりと映し出され、揺れている。小さな黄ばんだカードをたぐる白い指、物憂げに文字をなぞる眼差し、机を並べる名も知らぬ学生への密やかな連帯感、背表紙に踊る遠くて巨大な名前の数々……。

あのころの私もまた、彼とは違う道筋を通りながら、やはり自らが存在することの意味を見出せず、途方にくれる青年だった。そして、飢えた野獣のように万象の知識を求め、本棚の間を彷徨していたのだ、と。

そんな感慨を破り、彼は「僕は研究者になりたいんです。大学院に行きたいと思っています」と述べ、それから昂然と私を睨むように凝視しました。

ああ、この学生は自分だ、そのとき私は確

信しました。そして、上級生がどのような評価を下そうと、この学生をとろうと心に決めていました。

面接がすべて終わり、今度はゼミ生の評価を聞く段になりました。それで、と私が尋ねると、ゼミ生の代表が意外なことに最高点を得た志願者として彼の名前をあげたのです。「第一印象は最悪でした。とんでもないやつだと思っていましたが、今は私たちがもっとも一緒に勉強したいと感じる学生です」。

深刻な対立を予想し、心の準備をしていた私は、報告するゼミ生の顔を、思わずまじまじと見つめてしまいました。それは私にとって忘れがたい、学生たちから多くのことを教えられた一瞬でした。

ゼミに入った彼は、猛烈な読書量で勉強し、大学院を目指したいと言っていました。しかしそれに、私はただ笑うだけでした。

4年になり、そろそろ卒業後の進路が気になりだしたところです。彼が私のもとを尋ねてきて報告をしました。「僕は、先生に大学院に行きたいと言っていました、卒論を書くようになって考えが変わりました。僕が本当になりたかったのが教員だと気づいたんです。自分と同じ想いを持っている子供たちに、自分の経験から語りかけられる教員になりたいんです」。それが彼の出した答えでした。

野獣のようなこの青年は、何時かきっと自分で自分の道を見出すだろう、私は心密かにそう思いながら、その日が来るのを待ってい

たのです。あるときふと交差した私と彼の道が、また分かれて行くことをどこかほろ苦い気持ちで感じながら、私はこのときもまた、笑ってそうと頷くだけでした。

今、彼は教員となるべく準備を重ねながら、公立図書館の臨時職員として働いています。

卒業後ふらりとゼミの春合宿に現れた彼に、どうなのと聞くと、「とにかく本だけは読み放題ですよ」との答え。一晩中後輩たちを議論に付き合わせた後、「先生をあとと言わせるお土産ができるまで、会いに来ませんから」と宣言すると、疲れも見せず明け方の街に颯爽と消えていきました。

あれがNさんですか、寝不足と酔いにふらふらになった後輩たちは、なんとも言えぬ面持ちで彼のいかつい背中を見送っていました。

人類の英知を集めた本の密林を、生きる意味を求めて手負いの若き野獣たちがさ迷っている、大学図書館はそんな場所でもあるのです。
(経済学部教授)



特集 こんな図書館がほしい Part1

中田 宏 横浜市長インタビュー (1989年経済学部卒)



今回のAGULIの特集は、「こんな図書館がほしい」です。この度、若き横浜市長として活躍されている本学卒業生の中田宏さんに、9月23日の大学同窓祭で公開フォーラムに出席された後のお時間をいただいて、図書館に対する思いを縦横に語っていただきました。

Q：中田さんの学生時代の、図書館にまつわる思い出をお聞かせ下さい。

中田：回数だけは、よく行っていましたよ。ほぼ毎日、午前中、もしくは授業が1時限から入っているときは午後の空いている時間に新聞を読みに行くんです。今でもあるんでしょうか、入り口を入れて右側の新聞コーナーに行っていました。いくつもの新聞を、比較しながら読んでいました。一つの問題でも、新聞によって、見方が違うでしょう。でも自宅では、そうたくさん新聞を取れるわけではないし、図書館がないとそういう読み方はできないんですよ。図書館で多くの新聞を読むというのは、多様な意見があることを知るいい機会でしたね。

Q：最近の学生は、実は、新聞をあまり読まなくなっているという傾向があるのですが。

中田：僕はね、「他のものを読まなくとも新聞を読め」と言いたいですね。新聞には、すべてのものが詰まっているでしょう。政治、経済、国際、金融、文化、新商品、世の中のトレンド、スポーツ、エンターテインメント、文化、図書等々。新聞が一番いい情報源なんです。新聞を読まない学生には、「新聞を読んでないと就職もできないよ」と言いたい。新聞を読まないというのは、まさに最低レベルにも達していないということです。

Q：自分がもし大学生に戻ったら、「こんな図書館がほしい」ということはありますか。

中田：蔵書冊数や、使い勝手はいつの世にも求められる事でしょうし、これからは電子情報とミックスした利便性も求められ、図書館は広い定義で考えていかなければならないものでしょう。ただ、ご質問の自分が大学生に戻ったら「こんな図書館がほしい」ということを僕なりの表現で言うならば、雰囲気の良い図書館がほしい、ということに尽きますね。学ぶ意欲が湧くような、いい意味で緊張感があって、落ち着ける空間であることです。

Q：図書館の職員に対しては、求めることはありますか。

中田：そうですね、もともと、縁の下の力持ち的な存在ではあるのですが、人が来るのを単に待っているスペースではない図書館というものをどうやって作っていくか、を考えても良いかもしれないですね。待ち受ける場所ではなく、積極的に情報を発信していく、そしてその情報に惹き付けられて来る図書館というものにしていかなければならないと思います。また、図書館の職員の仕事にはマニュアルで出来る部分もあるし、一方には経験があって、継続性というものをしっかりとわきまえた人が必要だと思いますので、中身を考えた人的資源配分をするべきだと思います。

Q：中田さんは現在、横浜市長として市政に携わっていらっしゃいますが、学生だけでなく、市民の生涯学習という観点から、図書館をどのように位置づけられますか。



中田：市の図書館のような公共の、パブリック性をもった図書館というのは、それぞれ子どもの絵本からベストセラーまで、いろいろ揃えなければならないという要求があります。それに対して、大学図書館の場合には、大学図書館だからこそできる、落ち着いて、ターゲットを絞った図書館作りがあってもよいと思います。そしてそれを、大学関係者はもちろん、それ以外でも広く利用できるようになるといいですね。例えば今、六本木ヒルズに図書館があって、経営・経済に関する資料がそろっています。そこの利用料はとて高いのですが、オフィスとして使っている人がいるということなんです。そのような図書館を、高くても使うというのは、世の中の図書館に飽き足りないからだと思うんですね。

Q：大学図書館についていえば、欧米では、24時間開館しているところも多いですね。

中田：そうです。六本木ヒルズの図書館も、24時間オープンですね。利用者側のニーズはそういうところにもあると思うのです。もちろん、24時間開館するためには図書館側の負担も大きいですから、そこは考えて職員の配置等をする必要がありますが。

Q：ほかに、こんな図書館であってほしい、というお考えはありますか。

中田：はっきりとした「ルール」のある図書館であってほしいですね。本の返却でも、期限通りにきちんと返却しなかった人に対しては、貸し出しを停止するとか。本を汚すのも本当に困りますよね。そういうことには、しっかりしたルールで対処してよいと思いますよ。それと、「うるさい図書館」というのは最悪ですね。静かな図書館であってほしいということが、僕が最も望むことです。ざわざわとうるさくて、落ち着いて本が読めないという状態が、図書館の魅力が一番損ねてしまっていると思うんです。図書館という、静

謐な場の雰囲気を、ぜひとも保ってもらいたいですね。

Q：最後に、青山学院大学の学生の皆さんに、図書館に親しむということについて一言、メッセージをお願いします。

中田：そうですね、図書館には膨大な本や資料があって、検索方法なども日々進化していますから、図書館を使いこなすというのは、一握りの人にしかできないかもしれません。僕も、すべての人にそんなきれいごとを求めるつもりはありません。ただ、図書館というものは有難い財産なんだということを、理解してもらいたいですね。本を自分で買うのは大変ですし、本を手元に置き続けて、利用したいときに利用できるようにするというのも大変なことです。そうした、個人ではできない大変なことを、図書館がやってくれるわけです。図書館は、そうした有難い存在として、私たちの知的好奇心を刺激してくれるところなんです。

そして、図書館を利用される方には、何よりも、静かに使う、というマナーを守ってほしいですね。図書館で、大きな声で騒いだりするのは恥ずべきことですよ。これはぜひ、皆さんに守っていただきたいと思います。



聞き手：館報編集委員長 申 恵丰（法学部）
図書部 須藤玲子

「こんな図書館がほしい」を裏返すと？

小田 光 宏
ODA Mitsubiro

「図書館学の5法則 (The Five Laws of Library Science)」と呼ばれるものがある。インドの世界的図書館学者であるランガナタン (Shiyali Ranganathan, 1892-1972) が発表したもので、図書館関係者にはよく知られている。図書館に関する様々な事象 (方針、あり方、活動、技能など) を説明する演繹的な原理とされ、下記の五つからなる。

第1法則

図書は利用のためにある
(Books are for use)

第2法則

いずれの読者にもすべて、その図書を
(Every reader, his book)

第3法則

いずれの図書にもすべて、その読者を
(Every book, its reader)

第4法則

図書館利用者の時間を節約せよ
(Save the time of readers)

第5法則

図書館は成長する有機体である
(A library is a growing organisation)

今回の原稿依頼を受けて、この法則が真っ先に頭に浮かんだ。それぞれの法則から、大学図書館のあり方や活動を導き出してまとめれば、自ずと理想的な姿が描けると思われる。そうした解説は、テーマにはぴったりではないかと考えたのである。

しかし、それでは、人の禪で相撲を取ることになってしまう。それよりは、たとえ取り留めのない文章であっても、一教員としての

考えを記すことの方がよいのではないか、図書館報の趣旨に沿ったものになるのではないかと考え直した。そこで、「こんな図書館がほしいなあ」という望みを、あるいは、「こんな図書館はいらななあ」という思いを、ランガナタン風に表した三つの願いとして、率直に述べたい。

◆第1の願い

多くの資料を、その利用者の前に

大学図書館には、図書や雑誌をはじめとする種々の資料が所蔵されている。そして、あるものは開架書架に並べられ、あるものは書庫に収められている。書庫は、人が入庫できるものが一般的であったが、現在では、相模原キャンパスの図書館の「自動書庫」のように、入庫できないものもあり、なかなかもどかしい存在となっている。

OPACと呼ばれるコンピュータ目録が普及すると、所蔵している資料を探すのにはこれを使えばすべて済むと思いがちになる。確かに、タイトや著者名、あるいは、キーワードを入力すれば、たちどころに数多くの資料が確認できるが、私たちは、そんなやり方だけをするのではない。もっともっと原始的なやり方で、資料に辿り着くはずである。開架書架の間を巡り、直接資料の背を眺め、これはと思った資料を手取るのである。OPACで検索して、求める資料が置かれている書架まで行ったときにも、近くを見回して、こんな本もあったかという発見をする。グリム童話で、ヘンゼルとグレーテルが森の中でお菓子の家をたまたま見つけることになぞらえ



て、こうした偶然の発見のことをセレンディピティ (serendipity) と呼び、利用者の行動を説明する専門用語にしているくらいである。

資料が書架に並べられ、それらを眺めたり、直接手に取ったりできる。これこそ、第1の願いの本質である。とりわけ、学問の世界に足を踏み入れたばかりの多くの学生や大学院生にとっては、圧倒的な数の資料の存在を体感することは、他に代えることのできない機会である。

しかも、10万冊以上の資料を開架する公立図書館が増えている今、大学図書館は、この何倍もの資料を利用者の目に触れるところに置くことを期待したい。そうしてこそ、学習や研究活動がさらに刺激されるのである。資料管理の点から言えば、「自動書庫」には大きな利点がある。それゆえ、大学図書館の新館建設にあたっては、その導入を検討すべきである。しかし同時に、直接手に触れることのできる資料の数を十分に確保されることを願ってやまない。

◆第2の願い

大学図書館員の質を確保せよ

資料と同様に職員も、ただいけばよいというのではなく、その質を維持し、高めていく経営的努力が求められる。職員の質と言うと、カウンター（窓口）での利用者との対応、すなわち、接遇の良し悪しがよく話題になる。確かに、物の言い方一つに過剰反応する人が少なくないと指摘される今日、接遇は重要な課題である。しかし、接遇は、大学図書館員固有の課題ではない。大学図書館員としては、もっと根本的な、もっと本質的な能力を磨くことが必要である。とりわけ、利用者サービスにおいては、二つの能力が、ますます重要

になっている。

一つは、レファレンスサービスの知識と技術である。情報源（レファレンスブックやデータベースなど）に関する豊富な知識を持ち、効果的に情報を検索するための高い技術を持つことが、職員に必要となる。もう一つは、情報リテラシーの育成に関する指導力である。利用者が情報を活用して問題解決を図ることができるよう、図書館利用を含む情報入手等に関する技能を指導できるようになることが求められる。

こうした能力を有する職員は、一朝一夕には育たない。一定の経験年数があってこそ、知識と技術が高まるからである。したがって、上述したサービスに従事する職員には、配属や研修に関して、いっそうの配慮を求めたい。また、職員自身の奮起も期待したい。資料や情報については、「大学図書館員に訊け！」と、今まで以上に皆が思えるときが来ることを、心から望む。

◆第3の願い

大学図書館は、学術機関の象徴である

最後の願いは、極めて単純である。大学図書館は、教育・研究の場である大学の象徴として機能する。したがって、これにふさわしい風格と雰囲気のある建造物（施設・設備）であってほしい。

もちろん、風格と雰囲気は、教育と研究を實質的に支える機能を、大学図書館が十二分に備えてはじめて醸し出されることは、言うまでもない。

（文学部教授 図書館情報学）

世界の図書館めぐり

小張敬之
OBARI Hiroyuki

今年の夏は、国際会議で米国とヨーロッパに行く機会を得た。7月24日から8月11日にかけて、米国で2つの学会、国際応用言語学会とFLEAT Vの会議に参加した。

また2つの会議の合間に、ニューヨークに5日間滞在し、コロンビア大学の図書館を訪問した。ここでは、ウイスコンシン大学、コロンビア大学、ユタ州のプリンガムヤング大学、ロンドン大学の図書館、大英図書館についての印象もまじえて簡単に報告した。

最初に訪問したのは、湖のそばにある①ウイスコンシン大学の図書館である。

図書館の入り口にはカフェがあり、表通りにはベンダーの店が並んでいて、学生たちが、昼食を買って食べていた。

7月30日から8月4日まで、②コロンビア大学の図書館を訪問した。

ユビキタスの時代にも、電子図書館の充実と同時に、荘厳さを醸し出す旧式のカードカタログも備えられており、伝統の重さを感じた。

勉強で疲れたときには、図書館のそばにあるカフェでコーヒーを飲みながら一息入れ、おしゃべりを楽しめるなど素晴らしい図書館である。

8月4日から8月10日まで、ユタ州、プロボの③プリンガムヤング大学で開催された学会に参加し、図書館を訪ねた。美しいこの大学は、末日聖徒イエス・キリスト教会教会教育システムが経営する私立大学で、ユタ州プロボ市にあり、1975年10月16日末日聖徒イエス・キリスト教会2代目大管長プリンガム・ヤングの提唱により、ユタ入植地における職業訓練、宗教教育を目的に創立された中等教育学校プリンガムヤングアカデミーが

①ウイスコンシン大学図書館

<http://library.uwsp.edu/>



②コロンビア大学図書館

<http://www.columbia.edu/cu/lweb/>



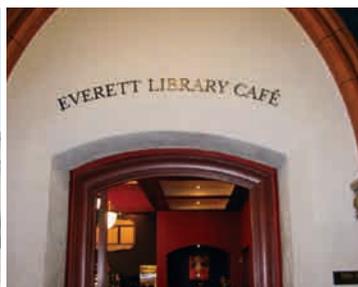
メインライブラリー正面



入り口



コロンビア大学 Law library



Teachers College 図書館カフェ



リファレンス関係図書室



インターネットで勉強する学生

前身である。1903年に現在の名称プリンガムヤング大学になる。

特徴は美しい花で囲まれたガラス張りの図書館で、地下には大きな、長い書庫があり、学生は地下でも勉強をしている。

8月23日から9月1日まで、ヨーロッパを訪問し、④ロンドン大学の図書館や大英博物館、大英図書館を見学した。

大英図書館 (British Library) は、約250年前に大英博物館創設時に集められた蔵書が多く、写本、初版の印刷本を所蔵している。いくつかの資料はロンドン近郊に分散しつつあったが、蔵書を一箇所にまとめる大事業が2000年の記念事業としてBritish Museumから近いSt.Pancrasの地に1982年、建設が開始され、イギリスの伝統ある赤レンガのカラーを継承し、都市環境に融合した素晴らしい新図書館が完成した。大英図書館はイギリスの国立図書館であり、納本制が採用されており、米国の議会図書館や日本の国会図書館においても、納本制度が採用されているが、大英図書館では、その歴史はずっと古く1842年からイギリスで出版された図書は大英図書館に1部を納本することと制定されている。大英図書館は、自国の図書館としての国家的機能だけでなく、世界の図書館としてその要求に応え、世界の遺産であり、蔵書の宝庫として世界にその至宝を提供している。

今回、米国とヨーロッパの4つの大学図書館と2つの国立図書館を訪問した。インターネットによる図書検索を採用している大学が多い中で、旧式のカードカタログ方式で図書を検索することも悪くないと思った。大英図書館においては、聖書から科学、音楽、芸術、文学に至るまで、時代を超えて原著にふれることができた。ここではヴァーチャルな世界では味わうことのできない感動を覚えたのであった。

(経済学部教授 英語/教育学)



カードカタログ検索



正面玄関にある返却ボックス

③プリンガムヤング大学図書館

<http://www.lib.byu.edu/>



山に囲まれたキャンパス



お花で囲まれた図書館

④ロンドン大学図書館

大英博物館

大英図書館

<http://ioewebserver.ioe.ac.uk/ioe/cms/get.asp?cid=10713>



The Institute of Education 正面



ロンドン大学の図書館入り口



キャレルで勉強する学生



大英博物館の図書



大英図書館 <http://www.bl.uk/>



メサイアの最初の楽譜

ウェブの時代の図書館

MARTIN J. Dürst

テュールスト マーティン ヤコブ

小学校から大学院まではよく図書館に行きました。図書館は必要不可欠な場所でした。でも十年以上前から殆ど行かなくなりました。なぜでしょうか。

1. ウェブの出現

World Wide Web（以下ウェブ）は Tim Berners-Lee により 1989 年に提案され、1994 年あたりから爆発的に普及して、今はもうウェブ無しの世界は考えられないようになりました。私も長年ウェブの国際化に貢献し、ウェブの総本山と言われる W3C に勤めました。図書館に行かなくなったのはウェブのせいです。

2. ウェブと図書館の競争

二千年ぐらい前から図書館は知識の泉と見なされてきました。しかしウェブが現れたことによってこれが変わりました。情報の正確さではまだ図書館の方が優れていますが、ウェブでも優れたものが増えて、個人である程度見分ければ十分なところが多いです。しかもウェブはパソコンとインターネット接続さえあればいつでもどこでも使えます。ウェブに物理的に「行く」ことはありません。「ここには置いてありません」ともウェブではいわれません。しかもウェブは図書館に比べて更新が早いところは圧倒的に早いです。情報テクノロジーの多くの研究者は国際会議や雑誌に投稿する論文を何かの形でウェブに載せることが多いです。ウェブは多くの点で優勢になっています。

3. 検索の競争

サーチエンジンでウェブ全体を一発で検索できます。ウェブページ間のリンク等を分析し、検索対象に一番合っているページを割り

出す技術が発達しています。競争が激しく、次々進歩し、即座に一般のユーザが使えます。これに比べて図書館の検索は多くのデータベースに分かれ、概要など本文以外の情報に限定されています。データベースは大金で購入した検索システムをすぐに買い換えることも、図書館が契約したデータベースをすぐ切り替えるのも無理です。一方で本の販売サイトは出版社と共に本の本文検索を提供し始めました。完全に図書館の負けでしょうか。

4. ウェブの時代の図書館の役割

図書館の時代はもう終わったのでしょうか。そうではないと思います。どんどん変化するウェブの世界、出版の世界では図書館の役割は相変わらず高いと思います。一つは平らな画面ではなくて本物の本を通じて学生に読むことへの興味、研究の楽しさを実感させることです。もう一つはユーザの手伝いです。複雑な検索とユーザを考えたデータベースの提供者などとの交渉が考えられます。もう一つは長期的な保存です。

図書館がウェブを活用するのも大事です。個人的にちょっと残念だと思うのは大学全体のウェブページからのリンクです。学部・学科・研究室へのリンクと同様に「オリジナルサイト」という小さいリンクしかありません。大学全体のウェブページから軽視されているような印象になっています。是非大学全体のウェブページの運用者に大学での様々なウェブサイトとの連帯をもっと考えて欲しいです。

(理工学部助教授)

新図書館に望むこと

川口悦
KAWAGUCHI Etsu

私と青山学院大学図書館との付き合いは、大学院時代にさかのぼり、かれこれ16年になる。総研ビル5階には、専攻ごとに院生室が設けられており、大学院生の自習室として自由に使えるのだが、当時の私は専ら図書館を「学内の勉強部屋」として利用させていた。館内に所蔵されている必要な文献資料をまとめて手に置いておけるという利便性と、特に利用者がまばらになる夜の静かな雰囲気が気に入っていたのである。

また、参考係の方々には、学生時代から現在に至るまで国内外の文献取り寄せなどで大変お世話になっている。最近では、電子ジャーナルの導入により、海外の論文が個人でも手軽に手に入るようになってきているが、入手困難な文献などは、取り寄せをお願いしたり、入手方法の助言を受けたりして、文字通り大いに参考にさせていただいている。

このように私にとって大学図書館は貴重な存在であり、とりわけ研究活動を続けるうえで有難い施設である。学生時代は感謝こそすれ、要望など思い浮かばなかったが、本学の専任教員になってから常々感じていることが2つある。1つは、2キャンパスの図書館に設置されているコピー機を1種類のコピーカードで利用できるようにして欲しいということである。私の場合、相模原キャンパスに個人研究室があり、授業も主に同キャンパスで行うのだが、専門関連の書籍や雑誌は青山キャンパス図書館に所蔵されていることが多いために、そちらを頻繁に利用している。しかし、現在専任教員に支給されているゼロックスカードでは青山キャンパス図書館のコピー機は使えないのである。購買会で授業・

研究用カードを購入し、残高が無くなればその都度買い直さなければならず、特に大量に複写する必要がある場合には不便を感じている。これは学生や大部分の教員にはあまり関係のないことなのかもしれないが、2キャンパス図書館で共通のコピーカードが利用できるようになると、青山キャンパスを拠点とする人文系の専任教員にとっても、相模原キャンパス図書館のコピー機利用がし易くなるのではないだろうか。

もう1つの希望は、自習室の設備の向上である。例えば防音の個室を数多く設け、できるだけ多くの利用者が集中して勉強や読書ができるような環境を整えていただければありがたいと思う。尤もこれは図書館利用者の意識に大きく依存し、「館内では静粛に」という当たり前のマナーさえ守っていればあまり必要ないことかもしれないが。

結局、コピーカードにせよ、防音室にせよ、設備面や機能面でいくら魅力的で便利になろうとも、最も大切なのは利用者のモラルであろう。マナーをルールに換えなくても済むような利用者の心構えこそ、従来の図書館同様、新しい図書館においても一番求められることであろう。学生時代お世話になった自習室が新図書館になっても静かで快適な空間であり続け、ひいては図書館全体が今後も充実した施設として存続できるように、私も含め利用者1人1人が高い意識を持ち続けるようにしたいものである。

(理工学部助教授・英語学)

CiNii (サイニイ) は国立情報学研究所が提供している GeNii (ジーニイ) (NII 学術コンテンツ・ポータル) の4つのサービスのうちの1つです。

他には、本・雑誌を探す >>Webcat Plus、研究課題・成果を探す >>KAKEN (科学研究費補助金データベース)、分野別専門情報を探す >>NII-DBR (学術研究データベース・リポジトリ) があります (図1)。

CiNii では、主に学術雑誌と大学等で発行された研究紀要を検索することができます。一部ですが、本文を表示したり、プリントアウトできるものもあるのが特徴です。CiNii に収録されているデータベースについては <http://ci.nii.ac.jp/cinii/pages/cinii-db.html> を参照してください。

CiNii の利用方法について、わかりやすくご説明しましょう。まず、図書館のホームページの左側メニューにある「リンク集」をクリックします。次に GeNii (NII 学術コンテンツポータル) をクリックします。

論文を探す >>CiNii をクリックすると検索画面になります (図2)。

CiNii には一部有料なコンテンツや利用登録が必要な機能があります。それらを利用せず、一般に公開されている機能だけを利用する場合には左側のログインボタンから入る必要はありません。

では検索の手順について例を用いて説明します。

簡易検索の入力ボックスに「産業技術史」と入力します。

検索結果の1~25件が新しい論文順に表示されます (図3)。

8番目の山田昭彦「我が国における初期のコンピュータ開発」をご覧ください。

『電子情報通信学会誌 86 (4) p 226-229』の下部に「本文リンク等: ←あり」と表示されています。



(図1) GeNii トップページ



(図4) CiNii 「詳細情報」



(図2) CiNii 検索画面



(図5) CiNii 「利用者認証」



(図3) CiNii 検索結果



(図6) CiNii 「ディレクトリ」

「本文リンク等:」をクリックし、さらに「本文(ELS)」をクリックするとキャンパス内のパソコンを使用した場合は左の詳細情報画面になります(図4)。上部のPDFボタンをクリックすると本文を表示することができます。

今回は一覧表示画面に戻り、5番目の「コンピュータおよびLSI用設計自動化システムの変遷」『情報処理 44 (2) p 169-174』の「本文リンク等: ←あり」をクリックしてみます。

利用者認証画面になり、本文を表示することができません(図5)。ご自宅あるいはキャンパス内のパソコンでこの画面が表示されても、あきらめずに大学図書館本館、相模原万代記念図書館のレファレンスカウンターまでお越しください。本文をプリントアウトしてお渡することができます。費用はかかりません。大学図書館が機関定額制サービスに加入しているため、大学の構成員(教員、学生等)は個人でもCiNiiのユーザID(利用者番号とパスワード)を取得できますが、この場合利用料金は個人で支払うことになります。大学図書館本館、相模原万代記念図書館に来館していただければ、利用登録が必要な機能やコンテンツの利用も無料です。

最後に雑誌名から辿るディレクトリ(雑誌名一覧)を紹介します。検索ページの左側にあるディレクトリをクリックすると、学協会刊行誌と研究紀要の誌名から検索することができます(図6)。本文コンテンツには無料で一般公開されているものと有料のものがあります。いずれのものでも大学図書館へ来館していただければ、費用はかかりません。CiNiiを十分に活用して研究、学習に役立ててください。レファレンスカウンターでお待ちしています。

(本館運用課参考係 小林陽子)

レファレンスカウンター紹介

海外 ILL について

取り寄せた文献複写 103 件、図書 51 冊、これが 2004 年度の海外 ILL の数字である。

この数字を多いとみるか否かは意見の分かれるところかもしれない。文献複写に関しては、電子ジャーナルの普及で多少減少していく傾向にあるが、しかし、日本にない資料の取り寄せの図書館への要望は確実に増えていると実感している。

その大きな要因としては、データベース、インターネットの普及があげられる。かつてはどこが所蔵しているのかを調べるのが困難だった海外所蔵の資料が OCLC First Search WorldCAT および 各図書館のホームページから簡単に検索することができるようになった。

WorldCAT は世界最大級の文献所在データベースで、かなりのものがヒットする上、OCLC-ILL での依頼はフォーマットができており、大変スムーズである。以前は IPMO (International Postal Money Order 国際郵便為替) もしくは IRC (International Reply Coupon 国際返信切手) のみだった料金の支払いも、一昨年より OCLC-IFM (ILL Fee Management System) という自動決済システムと IFLA Voucher という IFLA (国際図書館連盟) が取り扱っている世界共通の金券 (パウチされたカード) でのやりとりが可能になり、益々便利になっている。OCLC WorldCAT で見つからなかった資料に関して参考係が、次に利用するのは、BL-OPAC である。

BLDSC (British Library Document Supply Centre) の会員になっているので、British Library (大英図書館) の蔵書目録に

アクセスし、そこから依頼をすることができる。それでも見つからないものは、その資料の出版地の国立図書館の OPAC で検索する。かなりの確率で資料が見つまっている。その依頼方法であるが、前述のようなシステムに加入していないので、いろいろな方法で直接連絡する。電子メールで依頼ができる場合もあるが、多くの場合 IFLA 国際貸出・複写申込票に記入して郵送で依頼する。この申込票への記入は何と今では化石となっている(?) タイプライターなのであるが、権威のある申込票なので、ヨーロッパとのやりとりでは一番安心だ。申し込み受付フォーマットを持たない図書館への電子メールでの依頼は、まだ不安がある。

このような方法で昨年だけでも、フランス、ドイツ、スイス、ベルギー、ポーランド、ニュージーランド、スウェーデンの図書館からの取り寄せに成功している。毎日、午後 2 時ごろになると郵便物が届くが、国際郵便物が届いた時のわくわくする気持ちはレファレンス・ライブラリアンの喜びの 1 つである。スタッフの中には苦勞して入手したため、涙する人もいるくらいだ。

インターネットの普及で世界がより近くなり、かつてはあきらめていた資料が入手できる時代になったが、まだまだ個人での取り寄せは難しいものが多い。

困難な資料の入手に少しでも役立てたら！そして青山学院大学から素晴らしい研究成果をあげていただけたらというのが、レファレンス・スタッフ全員の願いである。

(本館運用課参考係 須藤玲子)

オーデュボンの「アメリカの鳥類」

アメリカの自然保護団体であるオーデュボン・ソサエティーやニューオリンズの世界的に有名な動物園、オーデュボン・ズーにその名を残しているオーデュボンは、フランス革命の4年前にフランス領（現ハイチ）で生まれている。18歳の時アメリカに渡り、1819年34歳のとき事業に失敗したオーデュボンは短期間投獄された。幼年期にパリでフランス新古典主義画家のダヴィットに絵を師事したことがあるオーデュボンは、無一文から鳥の絵の本の出版を企画し、壮大な旅に出る。

徒歩か馬、もしくは川舟くらいしかなかった時代のアメリカ大陸の旅は冒険の連続であったことが1820年から40年半ばまでの彼の日誌や手紙からもうかがえる。

オーデュボンの作品の特徴は芸術家としての構図の美しさと、科学的な冷静な観察眼、そして暖かい好奇心に満ちた視点である。

この「アメリカの鳥類」の絵を見ながら彼の別の作品である『鳥類の生態』を読むと実に生き生きとした鳥の生態が目の前に広がってくる。

速いスピードで岸まで泳いでいくシチメンチョウ、瀕死の白鳥の心臓に鋭いかぎ爪を食い込ませるハクトウワシ、一羽が巣穴を掘るあいだもう一羽は外で励ましながら待ち、相手が疲れると交替してせっせと穴を掘るハシジロキツツキ、モグラや野ネズミ、時にはそうとう長いへびまで飲み込むアメリカシロヅル。美しい色の羽や飛翔する姿から想像できない獐猛さと、つがいのいたわりあう姿など思いがけない鳥の生態の発見がある。

この「アメリカの鳥類」は実物大で描かれているため初版はダブル・エレファント・フォリオと呼ばれている、本に使われる用紙としては最大のサイズで1827年から1838年にかけて全4巻で出版された。オーデュボンは435枚の図版に約1000羽以上の鳥を自然



にあるがままに再現している。

なお、本学の「アメリカの鳥類」は1971 - 1972年にニューヨークで発行された復刻版であり、元国立国会図書館司書監、故笠木二郎氏より寄贈されたものである。

展示：9月～11月、大学図書館本館

参考文献

- 「伝記・オーデュボン」
クロード・シュベル TBSブリタニカ 1990
- 「オーデュボン伝」
コンスタンス・ルーアク 平凡社 1993
- 「オーデュボンの自然誌」
スコット・R・サンダース 宝島社 1994

(本館収書課受入係逐次刊行物担当)

青山学院図書館モバイルサイト

携帯電話で、図書館の蔵書の検索・自分の借りている本の状況・図書館の開館情報がわかります。どうぞご利用ください！

<p>青山学院図書館</p> <p>1. 蔵書検索 (OPAC)</p> <p>2. 利用状況照会</p> <p>3. 開館情報</p> <p>[青山・相模原・短大]</p>	<p>貸出詳細 予約詳細</p> <p>◆通常開館 時間</p> <p>◇休館日</p>	<p>アクセスはこちらから</p> <p>http://mobile.agulin.aoyama.ac.jp/mopac/</p> 
---	--	--

◀ メニュー画面



館内では携帯電話を使用しないでください

万代記念図書館 図書館ガイダンス “すぐに役立つレポート作成ナビ”

図書館の使い方やサービスを紹介するとともに、レポート作成に役立つ情報収集のツールや検索方法について案内します。

開催日時 11月7日(月)・10日(木)・14日(月)・17日(木)

4時限目 (14:55~16:25)

会 場 相模原キャンパスB棟4階 B406教室

*PCを使って検索演習をします。学生証を忘れずに持参してください。

図書館のマナーを守りましょう

本を大切に!

本はみんなが利用します。
書き込みはしないでください。



館内飲食禁止!

大事な本を汚してしまうことがあります。
飲食はやめましょう。



盗難注意!

荷物を置いたまま席を離れないようにしましょう。
貴重品は、身体から離さないようにしましょう。

編集後記

今回の特集では、本学OBの中田宏さんをはじめ、様々な方々・諸先生方に、図書館をめぐる思いや希望をお寄せいただきました。また、「世界の図書館めぐり」は、写真を見るだけで胸が躍るような素晴らしい内容です。皆様ありがとうございました。(館報編集委員長 申恵丰)

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報 “AGULI” 第71号 2005年11月1日発行

編集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL.03-3499-1402 FAX.03-3407-4472

発行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 <http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>